

日時：平成 28 年 9 月 1 日（木）15:00～16:50

場所：第 2 水産ビル 4 階 4 F 会議室

【出席者】

< 委員 >

小磯委員【座長】、大津委員、河崎委員、津山委員、林委員、山崎委員、吉田委員、太田氏（折茂委員代理）、平野北海道総合政策部次長兼政策局長（山谷委員代理） 計 9 名

< 事務局 >

（北海道経済連合会）水野総括部長、山崎次長

（北海道）平野総合政策部次長兼政策局長、岩崎北海道 150 年事業準備室長、青山主幹、武藤主査

【議事概要】 ※発言順

- ・「バーチャル道民」のような文言は最後まで残らないと思っていたが、しっかり載せていただいた。様々な意見が寄せられたものをギリギリまで盛り込もうとした事務局の努力に敬意を表したい。
- ・PR 事業については、相当戦略的に、かつ早い段階から手を打っていくことが必要で、より大胆な表現、可能な限り具体的な PR 戦略が出てくるとよい。
- ・高校生の作文を審査したが、高校生がこれほどの意識を持っているのかと感銘を受けた。理想は全ての高校生、全ての道内の若者がこういったビジョンを持ってほしいが、現状ではそうではないと考えたと、若い世代へ北海道 150 年事業の浸透を図っていくための仕掛け作りが一層大事だと感じた。
- ・チームの PR をやっている、インターネット等の拡散の速さを痛感する。（北海道 150 年事業の）Facebook のページも、もっと拡散をして、150 年はこういう事業をやるということを北海道の大半の人が知っているくらいになるようにやるべき。
- ・「北海道みらい日誌」は、3 人の代表に選ばれなかった方も、それぞれ北海道の未来や現状に対して、若い方たちが真剣にそれぞれの思いをぶつけている印象であり、個人的にすごく感銘を受けた。
- ・北海道民の気質として、何となくまわりが盛り上がり始めると自分も乗るみたいなどころがあると思う。今回、一般の方をどれだけ巻き込めるかが一つのテーマになっていくと思うが、150 年に期待感をどれだけ持ってもらえるか、今後 2 年間でどれだけできるかというのがキーポイント。
- ・アンケートの結果を読んだが、具体的な記念セレモニーをベースにした市民カレッジや特定の産業についての勉強の場を、などの意見が出てきており、一般の方の知識欲やお祭りに参加したいという意欲は悲観するほどではないと思う。
- ・私が働いている道の駅で、お土産を入れる（オリジナルデザインの）紙袋が好評だったので、T シャツを作って「2018 年 Hokkaido 150 年」というマークを入れた。木古内から発信していきたいと思い作らせていただいた。
- ・北海道 200 年に向けてどうしていくべきかというのは、先進的で未来を見据えてくれるような人（企業経営者など）に入ってもらうことも重要。
- ・高校生の作文は私も読んだが、小中学生など、もう少し下の世代もそれなりに考える力があるので、彼らに向けた 150 年事業があってもいいし、そういうところにも是非力を入れてほしい。
- ・道民を世代別、ポジション別、カテゴリー別に分けてみる、できるだけ細かく分けてモデルを提示することが重要。
- ・「北海道みらい日誌」の意味というのは、北海道のこと、将来のことを真剣に考える状況を作ったということ。真剣に向き合うと、あれだけの若者の力が引き出せたということ。これが北海道 150 年事業では非常に大事な部分。
- ・（「北海道みらい日誌」を）道民に置き換えたらどうか。あなた達にとって、自分達にとって、自分の

企業にとって、北海道庁にとって、経済団体にとって、150年を振り返り、これから何ができるのか、もしそこで真剣な議論が交わされて、主体的な自分達の問題としてメッセージが出てくれば大きなこと。

- ・(北海道 150 年事業は) 主体的に自分達でやるという思いを持った人達をどれだけたくさん作っていただけるかにかかっている。その意味で、少なくとも北海道庁は、全ての部署がどういう取組をするのか真剣に考えていくような気運づくりが必要。
- ・道民全員が、もしくは北海道に何らかの縁のある全員が幅広く関わっていくという、真のパブリックインvolvメントにしていくのであれば、10年おきに必ず何かやってほしいというわけではないが、適切な記憶、語り継ぎ、接続しやすいような仕掛けができればよいと思う。
- ・道外の試合に行くと、ファンの人達が一定の時間になると県民歌を合唱する。そこで士気を高めてチームを応援するというのがある。広く道民から意見を吸い上げられるような仕組みづくりをして、道民歌をみんなで合唱できるような仕組みづくり、気運の高め方ができないか。他の県でできているのだから、北海道民にできない理由はない。
- ・北海道に関心のある民間企業からしっかりと事業資金を得て、新しい時代の仕組みとして、この事業を展開していく仕組みを提案していけば、それだけでも関心を持たれると思う。それを進めていく主体も、従来型の実行委員会という形だけではなく、そのためのNPOを立ち上げて新しいスタイルで目指していくことがあってもよい。
- ・「北海道みらい事業」の支援は、待ちの姿勢で、(支援希望が) 来たとしても無理矢理のパターンが多いのではないか。(こういったケースは) シンクタンクが大体失敗するパターンだと言っており、注意が必要。
- ・広報と経営戦略は一体で、そこを総合的に考えていかないと、無駄な経費が出ていき、蓋を開けたら結局はプロモーションが足りなかったということにもなってしまう。そういう仕掛けを、全体設計をしたうえで、北海道みらい事業を目玉にしていくとよいのではないかと思った。
- ・良い事例は、積極的に真似する、取り込んでいくことが非常に重要。
- ・北海道がこれから150年を迎えて、その先に行ったときに、木古内町のような小さな町は、ひとつの町として頑張っていけるのか、そういう時に、近隣の町と協力できる体制が整っていることが今後の北海道にとって大事なこと。
- ・この事業を通して我々はどうなりたいのか、どこまでいけばこの事業は達成されたとみなせるのか、定性的でもよいので、何らかの目標をもう少し表現されてもよいのかと思った。

(以 上)